

違わなければならないのです。

異国の丘シベリア抑留

東京都 島崎 武男

昭和二十年九月二十日、我々はソ連邦の満州国侵入による戦いに敗れて、無念の涙をのみハルピンにおいてソ連兵に武装を渡した。その後ソ連兵の銃に囲まれながら荒野の死の行軍を強いられ、海林より貨車に乗せられ、逃亡を恐れるソ連側に日本に帰すと徹頭徹尾だまされ続け、シベリア鉄道でイズベストコーバヤマで送られた。ここからさらに北へ白銀の荒野を十五日間疲労こんばいの極の中、同年十二月二日にシベリアのテルマに着いた。私はさらにこの奥地のモシカに送られた。苦難の年の暮れ、虜囚の第一日がこれから始まる。

消耗し切った体には極寒の地の暖炉のまきを拾いに行くのがやっとだった。ここで食わされたのはかつて

関東軍の馬の飼料だった皮かぶりのコウリヤン、カチカチに乾燥したトウモロコシ、どんなに煮ても柔らかくならなかった。しかもほんの一握りの量であった。

それでも何日か日を経過するにつれて体力は回復してきた。そして燃料運搬、家屋修理と作業を与えられた。それは伐採、搬出、製材と次第に重労働となり、しかもノルマを与えられるようになった。シューバーを着ての伐採、搬出、製材の作業は非常に重労働だった。この地域の冬の平均温度は零下五十度だった。そんな中で伐採、搬出、製材の作業にほとんどの者が従事させられた。そしてそれぞれに「ノルマ」を課せられた。

戦友の中には重い防寒外套を着ての伐採作業に機械に動けず、倒れる大木を避けきれずに下敷きになって死んだ者もいた。山からの馬力搬出で転落し命を失った人もいた。製材所で作業中製材機の上の振動する材木を足で押さえた一瞬に右足首から回転する丸鋸で失ってしまった人がいた。こんな重労働の中で干からびたトウモロコシや皮かぶりのコウリヤンでは弱りきっ

た胃が受けつけるはずはなく、みんなひどい下痢に苦しめられた。

このために極端な栄養失調になった戦友たちは次々と死んでいった。グッタリと疲れてだれもが何とかして生きることだけを考えながら眠った。しかし、どうしても生きることが希望をなくして自分から命を絶つていった人もいた。突然夜中に起き上がり「ホラ、船がきているじゃないか、早く行かないと乗り遅れるぞ」と、酷寒の戸外へはだしで飛び出した彼はとうとう発狂して死んだ。六月末になるとシベリアは日本の梅雨に似た雨がしとしとと毎日降った。そして、この時期、それまで氷結していた川の水が一斉に解けて雨水と合水して道路といわず丘といわず水侵しとなり、昨日までの雪原と道路は泥沼と化し、交通は完全に途絶した。これによりシベリア鉄道沿線からトラックで輸送されていた食糧はバツタリとまって陸の孤島になった。その間約二十日ほどは食うものは何もなくなってしまう。わずかに生えてくる草は手当たり次第何でも食った。馬糞を拾って丹念にお湯で洗い流し中から出て

くる消化していない麦を、根気よく集めてこれを缶詰の空き缶で炒って食った。作業の往復は馬糞を捜すのにみな目を光らせた。早く夏がきてくれ草が食える。昨日の朝は右隣に寝ていた友が死んだ。今朝は左隣の仲間が死んだ。こうして一体私はあと何日生きていられるだろうか。

シベリアの夏は短い、九月半ばには白銀の世界になってしまふ。収容所の寝台は二段ベットになっている。ところがこの二段ベットは上段と下段では気温がまるで違った。それは部屋の真ん中でたく大きなペーチカで暖められた部屋の空気は天井に上がってしまい、逆に冷えきった地面の冷気が部屋の床板を凍らせ、下段のベット周辺の空気を冷やしてしまふからだ。上段ベットでは暖かく寝られるが、下段では毛布を何枚重ねても寒くて寝られたものでなかった。

六月の雨季のころと同じように冬は雪のために食糧輸送が途絶えがちであった。

冬は草もない、木の芽もない。シベリアエゾマツの大木の幹を食って中で冬を越している紙切虫の幼虫を

とり、これを串にさして焼いて食うのが何よりのご馳走だった。また、この松の幹に張りついている黒いコケも食った。人間が生死の境のような環境の中では教養もなければ体裁もなくなってしまうものだ。生き延びるためにはどんなことをしてでも食べるものを探さなければならなかった。

シベリアの冬は長く夏は短かった、九月半ばには白銀の世界になってしまう。冬のシベリアの空はよく澄んでいた。澄んだ空に月が皎々として輝いていた。月を仰ぎながら私は思った。故郷のあの山や川も照らしにくれるんだらう。私は月に祈った。まだ元気でいてくれるなら、年老いた父母に必ず伝えてほしい。私はまだ生きている。しかし遠い祖国の肉親の幸せを祈りながら、この地シベリアで無念の涙の中で凍土の土になるだらうと。

無 題

静岡県 吉田 吉治

光陰矢のごとし、戦後早くも四十数年を経たが未だに忘れることのできないシベリア抑留生活。強制労働、それは人間として生きる最低生活だった。それが未だにハッキリと思い出せる。昭和十八年、宝清の騎兵連隊に入隊し、その後大代河に移駐したが、饒河のすぐ前はウスリー江で、対岸のソ連の山々には多くのトーチカ陣地があり、銃眼が夕日に照らされ薄気味悪く見え、その向こうにシベリア鉄道が走り、ピギンスカヤ市も望見された。後方は完達山脈によって遮られ宝清との連絡もままならぬ辺境の地であった。

それでも毎日毎日の猛訓練に明け暮れていたが、戦況など知る由もなかった。東安、牡丹江のような鉄道沿線にいと、兵力の移動を見て感ずる点もあったらうが、井戸の中のカワズとは我々のことで、まだまだ